

「肝心闇話」

校訓：自主 責任 奉仕 協力

(文責：校長)

よく学び、共に生きる生徒 ①正しく考える ②愛する ③尊ぶ

確かな学力 思いやりの心・たくましい体 豊かな人間性 主体的な生活設計 郷土を愛し、郷土に活きる力

□□オアシス

「おはようございます。」「ありがとうございます。」「しあわせだなあ。」「すみません。」

「量質転化」(空手家、南郷繼正)…復習「36」回！

「勉強がわからないんです。」…生徒の悩みのほとんどは学習面に関することではないでしょうか。その原因が教師の授業力不足なら別問題ですが、殆どのケースは、時間をかけて勉強していないことが多いと思います。

『学業成績=(学習意欲)×学習時間【量】×学習能率(方法)【質】』

いかに限られた時間で能率を上げて学習するか、学習方法を工夫することも大切ですが、自分なりの学習方法をみつけるためには量をこなさないといけません。デッサンを描くのに50枚しか描けない者と、5000枚描いても、まだやめようとしない者とでは差が出てきます。ゴッホは、ひたすら描き続け、炭鉱労働者のような逞しい筋肉質の腕をしていたといいます。手塚治虫は、3日間不眠不休で描き続けることがよくあったといいます。

「わかる」というのは、じわじわとわかるようになるのではありません。ある瞬間、電光石火の如く、「わかる」のです。鉄棒の逆上がりができるようになった日や自転車を乗れるようになった日を覚い出させてください。何日も練習していて、ある日、突然できるようになったでしょう。言葉を覚えることに関しても、何回も目で見て、耳で聞いて、時には臭いを嗅ぎ、手で触って、脳細胞に36回の刺激があつて定着しているのだそうです。

成長は日々の努力に正比例しません。努力直線に対し、成長曲線はある時に加速度的な飛躍が訪れます。そのブレークスルーの目安は、100回、あるいは100日だそうです。絵でも「100回描け」と言われますし、刑事は事件の解決のために「100回現場に行け」と言われるそうです。

また、身体に技術を身につけるには1000回の繰り返しが必要だという説もあります（野球の1000本ノックも理にかなっているようです）から、勉強の36回の繰り返しなんてのは、たかがしれています。

そして、生徒たちには、こう説いてあげてください。

「いいかい、勉強がわからなくたっていい。わからないから、学校に来ているんだからね・・・。」

そして、生徒たちが授業中に「わかった！」と言わしめることこそ、私たち、教師の仕事です。

「日常の五心」

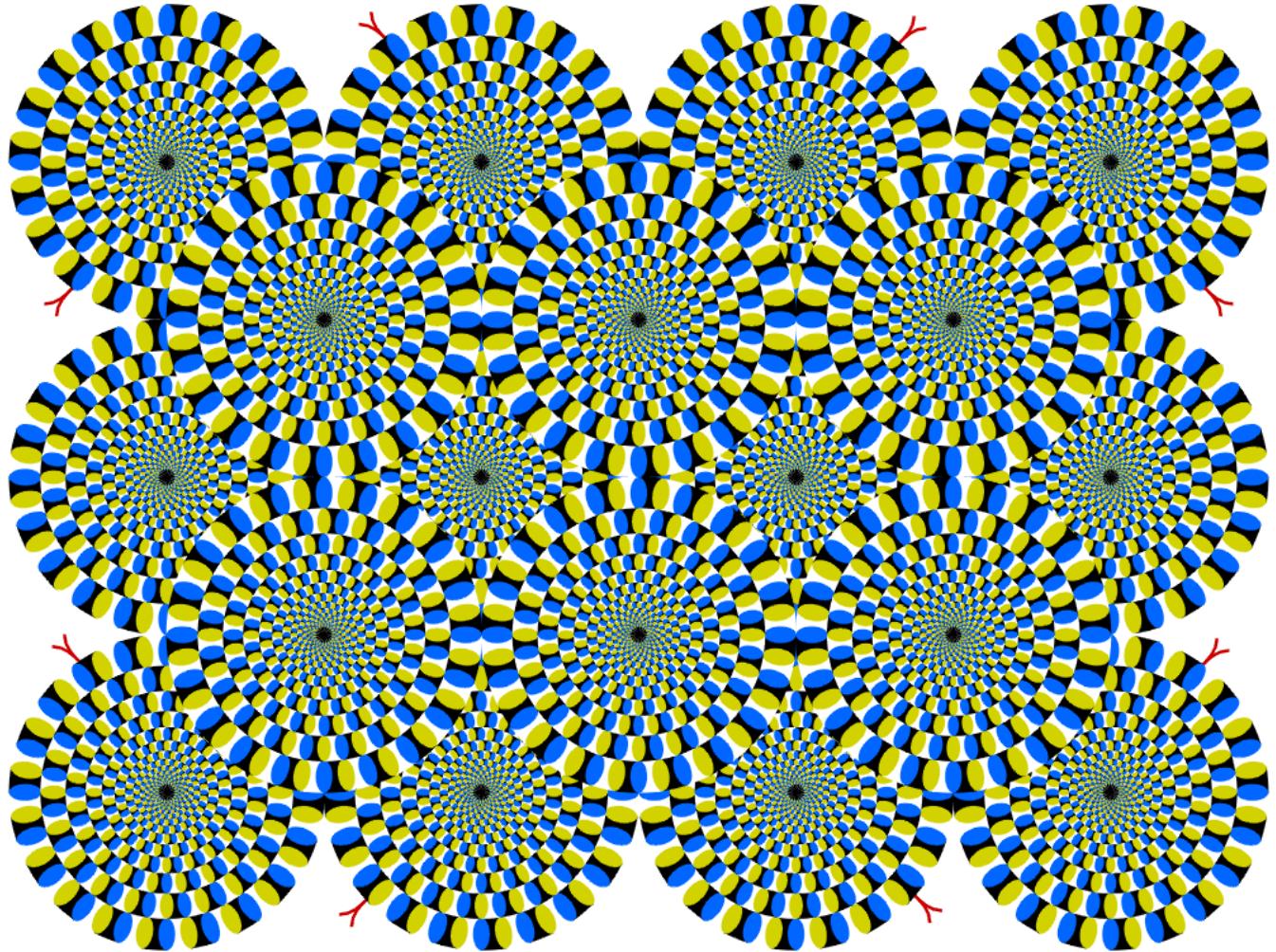
素直な心で「はい」と云い、
「すみません」と反省し、
「わたしが」と奉仕の心で、
「おかげさま」と謙虚に、
いつも感謝で「ありがとう。」

“From All Your Heart”

Say “yes” sincerely;
Be sorry for your mistakes;
Take an initiative to act for other;
Be grateful to others and remember to be modest;
And say “thank you” with appreciation.

「わたしの羊は、私の声を聞き分ける。」

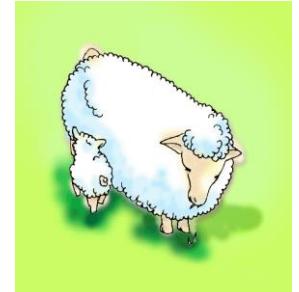
<聖書：ヨハネ福音書 10 章 27 節>



昔から人間は、真理というものを「見る」ことによって把握しようとしてきました。望遠鏡を発明して、より大いなる世界(マクロの世界)がどこまで続くのか探求し、顕微鏡を発明して、より小さな世界(ミクロの世界)をどこまでも細かく探求してきました。そのようにして科学は発達し、今日の社会がつくりあげられてきたのです。

しかし、これは、大変な危険性もはらんでいます。私たちは、真理とは「見る」ものであり、「見ることができなければ、それは真理ではない」と考えてしまう傾向があります。

上の絵を見てみましょう。よく、よく見ると、動いているはずもない絵が、見れば見るほど、動いて見えるという錯覚におそわれるでしょう。そう、見るだけでは、真理はつかめないのです。



だから、人間は、もうひとつ、真理の捉え方を持っています。それは、「聞く」真理です。

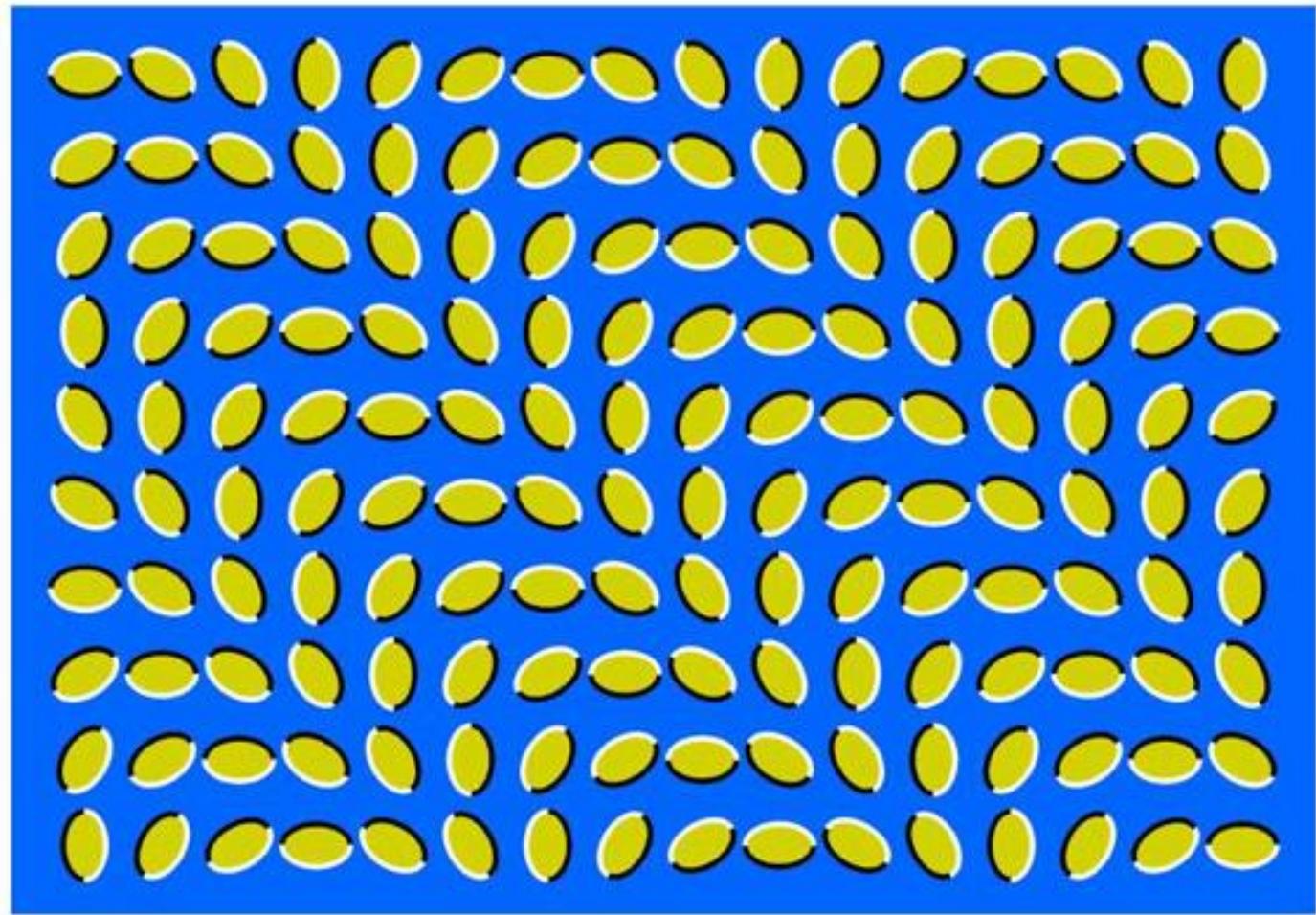
羊という動物は、目がたいそう悪くて、そのために自分の羊飼いを見分けることができないそうです。だから、聞き分けるという能力は抜群で、自分の羊飼いの声は決して間違えない、他の羊飼いの声にはついていかない性質があります。

親の言うことをよく聞き、先生の話にしっかり耳を傾けることは、見て把握するのと同じように大切なことなのです。アイヌのことわざに、「口は一つ、耳は二つ。」という言葉があります。しゃべる前に、話を聞くことを優先させましょう。

(おまけ)

「どうぞ、お話しください。僕は聞いております。」

<サムエル記上 3章 10節>



上の絵をよく、みてごらん。動いているはずのない絵が、動いてみえるという錯覚におそわれるだろう。

「百聞は一見にしかず」と言われるが、フランスの教育思想家ルソーは、

「**視覚は、五感のうちで一番当てにならず、間違いやすいものだ。**」と述べている。人間は、みるだけでは、真理をつかむことはできないのだ。

ちなみに、「みる」という英語には、“see”, “look”, “watch”などの言葉があり、「聞く」という英語には、“hear”, “listen”などの言葉があるのと同じように、日本語にも、同じ「みる」でも、「見る」、「観る」、「視る」などがあり、同じ「聞く」でも、「聞く」、「聴く」、「訊く」などがある。

真理はつかむには、視覚や聴覚だけに頼らず、味覚、嗅覚、触覚も働かせるべきである。

五感のうち、最も判断が正確で確実なのは、触覚だそうだ。技師や測量士、建築家、大工、画家など手を使う人が、一般の人よりも、はるかに的確に一目で空間の大きさや見積もりをできるのは、触覚が優れているからだろう。

ただ、現代人は、古代の人に比べ、五感が鈍くなってきたと言われている。知識が豊富になり、文明が発達するにつれて、五感をフル活用する必要がなくなってきたからだ。五感が最も優れていたのは、狩猟生活をしていた時代の人たちだったかもしれない。本来、人間は、テレパシーなどの第六感も持っていたはずだ。

不透明なこれから時代を力強く生きていくには、五感が鋭敏で、それでいて、コンピュータやジェット機も自ら操れる、いわば「**知的な野蛮人**」であることが必要だというわけだ。